

重度・重複障がい児における発信行動の分化を促す試み —係り手の対応に視点を当てて—

○ 佐藤 智 (福島県立郡山養護学校)

菅井裕行 (宮城教育大学)

1. 目的

ある一人の重度・重複障がい児 (以下、K) との抱っこでの係り合いの場面において、「自分の右膝を右手で叩く行動 (以下、右膝叩き行動)」、「抱えられている係わり手 (以下、A) の右手を左手で掴み、A の首方向に誘導する行動 (以下、左手誘導行動)」という上肢による発信行動が発現した。しかし、その意味を A が理解できず、K の不快情動の表出や自傷行動の発現等、係わり合いが滞る状況が見られた。そこで、その意味をさぐりながらも、それぞれに特定の揺らし方を意味付けたところ、それらを選択的に使用し、揺れの種類を伝える姿が発現するようになった。さらには、それまで発現していた「左手誘導行動」を自ら変化させ、「A の右手を掴みながら、自分の左膝に左手をぶつけて誘導する行動 (以下、左膝叩き・左手誘導行動)」を発現するに至った。

以上の係わり合いの経過から、本研究では、重度・重複障がい児における発信行動の分化を促す係わり手の対応について検討することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 係わり合い: 20XX+2 年 5 月から 20XX+2 年 10 月まで、K が在籍する特別支援学校及び入所する療育センターで 90 分程度実施。(2) 分析方法: 係わり合いの様子を VTR 記録し、K の上肢による発信行動の発現回数をカウントするとともに、発現様相をエピソード記述により分析した。(3) K について: 係わり合い当初特別支援学校小学部 1 学年。MR、視覚障がい (全盲、光覚程度)。自ら周囲の事物に移動したり、リーチングしたりする姿は見られない。(4) 分析対象: 抱っこを開始してから 30 分間とする。

3. 係わり合いの方針

(1) 上肢による発信行動 (「右膝叩き行動」、「左手誘導行動」、「左膝叩き・左手誘導行動」) に対しては、それぞれの意味を推測しながらも、仮に一義的に意味付けし、その意味を提案・確認するというプロセス (土谷, 2002; 菅井, 2008) を重視する。(3) 提案・確認に際しては、K が A の推測した意味について分かりやすいよう、聴覚的信号、触運動的信号を用いて行う。

4. 結果及び考察

「右膝叩き行動」及び「左手誘導行動」、「左膝叩き・左手誘導行動」の発現回数について図 1 に示すとともに、意味付けた内容について表 1 に示した。また、上肢による発信行動が発現した際の係わり合いの様子について表 2 に示した。

S 5 において初めて「左手誘導行動」に対し、「回転性の揺れ」を意味付けたところ、S 6 において K は「右膝叩き行動」と「左

手誘導行動」を交互に発現した。K は、A の提案・確認に対し、耳を近づけじっとする姿から、自分の発信行動と A の対応について、さぐりたしかめていたものと考えられる。S 7 においては、選択的に発信行動を発現し、その後笑顔を示したことから、K は A の提案・確認した意味について理解し、自らその意味を伝えるに至ったのではないかと考える。「左膝叩き・左手誘導行動」は S 11 において発現したものの、A はその発信行動に気づくことができず、「回転性の揺れ」と読み取り対応した。S 12 において再び発現したことから、その変化に気づき、新たに「反復性の揺れ」と仮に意味付けし、提案・確認したところ、何度も発現するに至った。K は、これまでの発信行動への意味付けを踏まえ、さらに自らの行動を変化させ、新たな A の対応 (意味) を生み出そうとしたと考える。

以上より、発信行動の分化を促す係わり手の対応は、子どもの発信行動に対し、可能な限り一義的に意味付けすることを目指し、意味付けた内容に対して、その確認を提案の形で打診するプロセスが重要である。そして、このプロセスは、微細な発信行動に対しても重要であると言える。提案・確認のプロセスを適応することで、子どもと係り手との間で、子どもの納得が得られる行動の意味を創り出していくことが可能になるものと考えられる。(SATO Satoshi, SUGAI Hiroyuki)

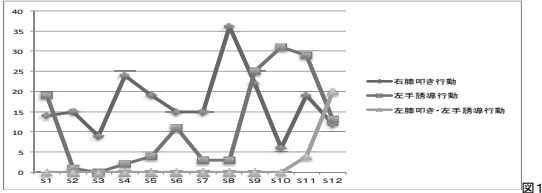


図1 右膝叩き行動、左手誘導行動、左膝叩き・左手誘導行動発現回数

表1 意味付けた内容			
意味づけ内容 セッション	右膝叩き行動	左手誘導行動	左膝叩き・左手誘導行動
S1	抱えたまま立っている等	抱えたまま立っている等	
S2, S3	上下の揺れ	仰臥位でのスイング	
S4	上下の揺れ	抱えたままイスに座る	
S5~S10	上下の揺れ	回転性の揺れ	
S11	上下の揺れ	回転性の揺れ	回転性の揺れ
S12	上下の揺れ	回転性の揺れ	反復性の揺れ

表2 係わり合いの様子	
S6	Kは発声せずに「右膝叩き行動」「左手誘導行動」を交互に発現しながら、左耳をAの口元に近づけじっと左耳の位置を保持したり、Aの首を引き寄せたりする姿が発現した。Aは、歌と揺れの提示による提案・確認に注意を向けているように感じられ、Kの左右の上肢の動きに応じて対応を繰り返した。
S7	Kの「右膝叩き行動」に対し「上下の揺れ」を提案・確認すると、「左手誘導行動」が発現した。KがAに向けて揺れの変更を伝えているように感じられ、Kの「転意」と捉えて「回転性の揺れ」を行うとKは笑顔を示した。
S12	発現した「左膝叩き・左手誘導行動」の意味が分からず表出確認のみ行うと、Kは再び同じ上肢の動きを発現した。そのため、仮に「反復性の揺れ」と意味付けし揺らすと、その後再び「左膝叩き・左手誘導行動」が発現した。